

## SIPEC-Social Capital の醸成に向けて：

卒業生から在校生・学部コミュニティへ  
「つながろう、つなげよう」

田中（坂部）有佳子\*

『卒業生から得る学び』と題した 40 周年イベント第 2 部では、学部を巣立って 5 年目にあるヤング・キャリアの方から管理職のポジションをもつ方まで、6 名の卒業生が登壇した。各登壇者には、学部で学んだことは何か、そしてその学んだことがどのように仕事に活かされているかについて、それぞれの立場からお話いただくことで、在校生のキャリア形成の一助となることを狙いとした。金融、国際機関、製造業、エンターテインメント、情報技術 (IT)、報道と多様な業界から参加いただいた。以下が 6 名の講演テーマである。

1. 原千草さん (1994 年度国際政治学科卒業、モルガン・スタンレー／Morgan Stanley) 『国際政治経済学部での学びを胸に海外で働くこと』
2. 大室直子さん (2003 年度国際政治学科卒業、国連世界食糧計画／United Nations World Food Programme) 『よりよい世界のために自分ができることを探した学生時代』
3. 吉丸哲史さん (2001 年度国際経済学科卒業、株式会社ミスミグループ本社より MISUMI KOREA CORP. へ出向中) 『大学時代の原体験からアジアでのビジネス展開支援へ』
4. 金子梓さん (2015 年度国際政治学科卒業、スカパー JSAT 株式会社) 『学生時代の経験が社会人人生でどのように活かしているか』
5. 山崎繁さん (1998 年度国際経営学科卒業、日本アイ・ビー・エム株式会社)

---

\* 国際政治経済学部助教

『国際政治経済学部を経た私の現在とこれから』

6. 張弘基 さん（2018年度国際コミュニケーション学科卒業、一般社団法人共同通信社）

『大学時代の試行錯誤、背中を押してくれた恩師の存在』

幾つか講演内容を紹介したい。トップバッターは、原千草さん。ニューヨークより、現地時間が夜半となるなか、オンラインでご登壇くださった。アメリカに本拠を置く外資系企業でキャリアを積みながら、学部時代のボランティア経験をきっかけとして環境改善に関わる社会活動にも取り組まれているとのことである。今はなき厚木キャンパスではテニスサークル活動にのめりこんだ一方、異文化経営・異文化コミュニケーション論から異なる価値観をもつ人と接するときには、相手の立場に立って考える、相手を理解しようとする姿勢を学んだことが仕事にも活かしている、と語られた。孤独を感じるときの対処法は何かとの学生からの質問に対し、初めての場所では相手を理解しようとする努力、これまでしなかったことに挑戦する、レジリエンス（困難な状況に適応していく力）を身に付けていくことの重要性を指摘された。

人種のるつぼであるニューヨークでの仕事・生活は、日本人としての誇りを感じる時もあるとの指摘、そしてDE & I（多様性、公平性、包括性）が重視されるなか、公私にわたりそれをしなやかに実践されている原さんの姿に、自分の将来像を重ねた学生もいたようである。スクール・モットー「地の塩、世の光」に触れられ、ひとのためになりたい、役に立ちたいという奉仕の精神が学院での学びのなかで培われたとのコメントは、この学び舎にいる我々にとり、心強く感じられた。

大室さんからは、国際協力の分野を仕事とする夢を叶えていったプロセスを紹介いただいた。柔軟性と機動性というキーワードを軸に、西アフリカで村長ら男性ばかりとの話し合いが行き詰まった際に女性と話すことで難所を乗り越えたこと、食糧庫設置の必要性を訴えてJICA（国際協力機構）や日本大使館から協力を得られることになったエピソードを披露された。まず周りに問題や

課題を伝え続けること、行動を続けることで次の突破口を見出していったという学部時代の経験が、今までの仕事で活かされてきたと振り返られた。在学生からの質問を受け、留学先の決定に関しては学びたいプログラムを重要視したこと、国際協力の仕事に従事するうえでは現地のひとにとってためになることができているかを問い続ける必要性を力強くお話されていた。また、国際機関では女性が上司となる確率が高く、女性にとって、キャリア形成上のロールモデルを見出しやすいそうである。子育て期には家族帯同の出張が認められており費用の支援もある等、女性が働きやすい魅力的な環境があることも述べてくださった。

博友会（外交・国際公務指導室）やゼミを通じて培った同級生、先輩、先生方とのつながりは、異なる業界でも仕事を共にするきっかけとなったり、折に触れ相談しあうなど、今でも公私にわたり健在であるという。締めくくりには、「あなたのそばには、あなたの未来を導いてくれる友、先生、学校がある。そこに手を伸ばすかはあなた次第」と在学生に熱いメッセージを送っていただいた。

ソウルからオンラインで参加いただいた吉丸さんは、日本とアジアをつなぐ仕事をされてきた。大学時代はアジア経済論、開発経済学の学びをきっかけとして、バックパックを背にアジア各地を歩き回ったなか、フィリピンのゴミ山に広がるスラムの圧倒的な現実に気後れしたという。問題の構造を的確に捉えるフレームワークを知らなければ、巨大な現実は理解さえできないと痛感。同時に援助ではなくビジネスで変化を生み出す方がよほどフェアであると感じ、また、新興国の台頭で日本のものづくりが変化するなかアジア×製造業を軸にビジネススキルを磨きたいとの考えに至ったと振り返られた。本学大学院に進学後コンサルタントの世界に入り、アジアでビジネスを展開する日系企業のプロジェクトを支援する業務に関わった。順調にキャリアを重ねてきたと思った矢先、次々と噴出する課題に対応できないまま失敗を重ねる時期があったことを率直に語られていた。そこから MBA（経営学修士）での学びを通じ、日本企業と日本人が広く価値として認められ活躍し続ける触媒になることを目指

し、その後のコンサルタントとしてのキャリアアップ、さらに事業当事者への転身とアジア各国事業の主導経験、現在注力される最先端のデジタルものづくりの海外展開の挑戦へと、発展的な積み重ねを共有いただいた。在学生からは物流からみたビジネスモデルの強みとは何かとの質問に対し、グローバルでの確実短納期の徹底と在庫リスク最適化についてお答えくださった。

吉丸さんは、ご自身の体験を余すところなくお伝えくださることで、「行動によってしか新たな視野は開けない、行動してみることでまた違う角度から自分自身を捉えることができる」とのメッセージが参加者らに直に伝わったのではないかと思う。

金子さんの学部時代の活動は多岐にわたっている。金子さんは「外の世界、様々な人と交流し、あらゆる価値観に触れること」を主題として、博友会、アジア法学生協会などのサークルに加え、ケニアへのスタディツアー、WFP（国連世界食糧計画）でのインターン、東南アジア青年の船事業への参加まで幅広い活動をしたと紹介いただいた。社会人となってからの広報の仕事では、実体験は、その体験を伝える熱量と比例すると気づいたそうである。情報を提供する際に受け手をイメージすることを意識し、広報誌のコンテンツを考えたとの経験を共有いただいた。身をもって体験しえたことは、一次情報として自分に落とし込むことができるという点は、見聞きだけに留まらない経験の重要性を伝えてくださる貴重な指摘であろう。

金子さんは、制約が少なく自由度が高い学生生活で何を成し遂げたいか、を在学生に問いかけていた。疑問に思ったこと、気になったことは実際に行動することで経験として吸収し、世界観を拓ける。これらはコミュニケーション能力を培うことにもなり、社内外の多様な考え方もつ人との対話を円滑に進め、ネットワークを構築する態勢ができたとのことである。

張さんは、学部時代を試行錯誤の連続であったと振り返った。国際交流や文化事業への関心から学部のインターンシップ・プログラム（国際交流基金）に参加したり、ロールモデルとなった留学生の方から刺激を受けアメリカへの交換留学に至ったりした経験を率直に共有いただいた。また、国際関係における

メディアの影響に興味を持ち、大学2年次からジャーナリズム指導室に入室。青山祭で来訪者取材した活動や福島県南相馬市へのフィールドワークについて話し、直接話を聞いたり、現場に足を運んだりした経験が、自身の行動力に繋がったという。ゼミでは文献を読み、他の学生と一つのテーマについて議論を重ねたことが、自分とは異なる考え方に触れ、柔軟な思考をする大切な経験だったと述べられた。このような活動をしてきたものの、方向性が定まらず、本当にやりたいことについて悩み、迷ったときにもらった恩師や友人のアドバイスは背中を押してくれるありがたい存在だったそうである。学内外での経験を通じ身に着いた考え方や行動力が仕事に役立っていると語った。

「生涯チャレンジャーでいきたい」という海洋冒険家の堀江謙一さんの言葉を紹介しながら、張さんは「パンデミック、以前とは違う日常（ニューノーマル）のなかでも自分ができることは何かを模索し続けていこう」とのメッセージを伝えた。オンラインでの打ち合わせやマスクをした状態での取材は非言語情報が制約されるコミュニケーションとなり、模索の連続である。しかしながらとりあえず行動してみたとの学部時代を踏まえ、今までとは異なる環境でも、いろいろ手を出すことも、一つのやりたいことを掘り下げるのも経験のひとつであり、「あの時、試みておけばよかった」と後悔しないよう試行錯誤があってよいのではないかと、激励の言葉で締めくくっていただいた。

在校生にとってこれらのご講演は、学部コミュニティとつながること、そして、つながるには自らコミュニケーションを続ける大切さを実感する機会となった。事後のアンケートでは、在学生より「卒業後の進路をリアルに想像できた」、「今後に生かせそうな学びがあった」、「第一線で活躍する先輩の姿を拝見し、自分もそのようになれるように今を大切にしたい」、「誇りをもって話される姿に非常に刺激を受け、残りの学生生活を悔いなく過ごしたい」などの感想があった。個々では主体的にチャレンジし続けること、そして周りとのコミュニケーションをとりつづけていくことに関し、6名のご講演からヒントを得たのではないかと。



ハイフレックス方式で開催された40周年イベント  
本多記念国際会議場にて（2022年6月18日）

さらに6名のご講演は、卒業生、教職員、退職された先生方や職員の方々を含めた学部コミュニティにとっても前向きになれる波及効果をもたらした。冒頭で述べたように、第2部は在校生が将来の自分の姿を考える糧となることを願って企画されたものである。しかしながらご卒業生からも「卒業生のエネルギーに感動した」、「様々な考えにふれてさらに意欲的、前向きになれた」、「元気をもらった」、「成功談だけでなく失敗談から得た教訓を具体的に語ってくれたことに感謝。卒業生にも気づきが多くあった」といったコメントを頂戴した。第一部白川先生のご講演にもあった、見通しが難しい国際情勢、少子高齢化など、まったなしの課題に直面する我々にとって、末田学部長の挨拶にあったように、Social Capital(社会関係資本)のなかの一員であることを認識する機会となったと思われる。Social Capitalとは、社会・地域において、人びとの信頼関係・ネットワーク、結びつきを表す<sup>1)</sup>。人と人との結びつきが密で

1) デジタル大辞泉、小学館/ジャパンナレッジ lib、2022年7月8日アクセス。

あると相互の信頼が醸成され、警戒心が薄れるので、協力を生み出すことが可能になると考えられている。これからの学部の歩みとは、卒業生から在校生、そしてその後の代に跨がる「つながろう、つなげよう」の循環が引き続き生まれることであろう。そして、その循環を通じ、学部コミュニティのなかでさらなる Social Capital が醸成されていくことであると確信している。

コロナ禍の先が見通せない中、ハイフレックス形式での開催は、在校生が国内外の先輩方と対話できる絶好の機会となった。一方で講演者、参加者らと懇談を希望する声も多く聞かれ、感染収束とともに次の学部イベント等で是非その実現を委ねたい。また、予定時間を相当に超過し、参加者にご迷惑をおかけしてしまった。この点は運営側の反省として受け止めている。第2部も株式会社日本コンベンションサービスの皆様、司会、受付、会場運営、記録撮影の役を担った学生ヘルパーの皆さん、職員の方々の協力があった。講演を支えてくださった方々の活躍に感謝の意を表する。

「これからの学部の40年も楽しみになるイベントであった」との感想を参加者より頂き、今後の学部の歩みがこのコミュニティとともにあることを確認した一日であった。おりしも、イベント当日6月18日は国際反ヘイトスピーチの日であった。本学部が標榜する Globalization begins within は、まさに隣の人をもつ考えや価値観に触れ、一人ひとりが多様性と包括性を認め合うことから始まるだろう。これらの実践を通じ、豊かな Social Capital を国際政治経済学部 (SIPEC) にて育てていきたい。

(40周年記念イベント報告編集：猿橋順子)